


  
 書 評
   


① 野々山久也 + 袖井孝子 + 篠崎正美編著  
 『いま家族に何が起こっているのか』  
 ミネルヴァ書房 1996年8月 (A5版 364頁 3200円)

② 杉本貴代栄編著  
 『社会福祉のなかのジェンダー』  
 ミネルヴァ書房 1997年5月 (A5版 284頁 2800円)

---

船橋 恵子 (桜美林大学)

---

最近、家族に関する優れた書物がいくつも刊行されているが、その中でも上の2点は、「家族看護」を学び実践する者にとって、参考になりそうな視点を豊かに含んでいるように思われる。

①は、1991年に日本家族社会学会が設立されたのを機に、学会の研究成果を系統的に出版し世に問う目的で企画された「家族社会学研究シリーズ」の第一冊目である。家族の変化とはいったい何なのか、その変化について家族社会学は学問的にどのように捉えているのか、今日の家族研究の課題は何なのか、アジアやヨーロッパの家族変動と対比させたとき、日本の家族はどのように位置づけられるのか、等の問題について、ジャーナリスティックな評論ではなく冷静な分析を試みている。全体は4つのパートに分かれる。第I部で、家族の「個人化」と「私事化」の進行が、意識調査、農村調査、規範分析、夫婦関係分析を踏まえて論証される。第II部では、家族の「多様化」の諸側面が、主婦の就労に伴う性別役割分業の変化、高齢者世帯をとりまく親族ネットワークの変化、親子関係の変化、夫婦関係の変化について検討される。第III部では、中国、韓国、イギリス、スウェーデンを取り上げつつ、家族変動の比較社会学が試みられる。そして第IV部では、変化しつつある現代日本家族を捉えるための理論的パラダイムが、家族ライフスタイル論、家族変動論、近代家族論について検討されている。本書は、日本の家族研究最前線が示されている書物と言えるだろう。確実な研究成果を知りたい人に、是非一読を勧めたい。

②は、長年アメリカと日本で母子福祉の調査研究に従事してきた杉本貴代栄さん(金城学院大学教授)が、21人の福祉活動家や研究者と共に、日本の福祉現場におけるジェンダーの問題を初めて具体的かつ包括的に展開した画期的な書物である。福祉や看護の領域では、とかくジェンダーの視点は希薄であり、福祉や看護をジェンダーの視点から分析した書物も、あまりなかった。しかし、社会学では、階層、エスニシティ、環境と並んで、もはやジェンダーの視点は欠かせない重要性を持っている。本書で扱われているトピックは、福祉事務所のあり方、婦人保護事業、山谷地域と売春問題、婦人相談事業、駆け込み施設、民間シェルター、フェミニストカウンセリング、母子寮、障害児を持つ母親、養護施設、少女の自立支援ホーム、精神障害者福祉における女性、女性センターのあり方、女性障害者が地域で暮らすために、夜間保育園、雇用均等法とハローワーク、特別擁護老人ホームと女性問題、ホームヘルプサービス、訪問看護と女性問題、社会福祉協議会とボランティアコーディネーター、と広い。福祉と看護とは異なる面もあるが、例えば精神障害者福祉において「治療や援助が家族によるケアを前提にしている」ため「家族は重荷を下ろしたくても下ろす場がない」(p154)という指摘などは、家族看護学にも関わってくる問題であろう。これから医療や看護におけるジェンダーの問題を考えていくときに、本書は豊かなヒントを与えてくれるに違いない。